

浄土

1978-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投承認准) 第三五号
昭和五十二年十二月二十五日印刷 昭和五十三年一月一日発行
第四十四卷 第一号



S. Kuz



少年得度淨因長
 老去追思母芳
 最是慈恩能哺我
 一盆草餅味難忘

昭和戊午年正月御題母謹賦

華頂山式納遊全宏 九十八



母に寄せて

浄土門主

岸 信 宏

少年得度淨因長
 老去偏思悲母芳
 最是慈恩能哺我
 一盆草餅味難忘

昭和戊午御題母謹賦

正月号



三心も南無阿弥陀仏、
五念も南無阿弥陀仏、
四修も南無阿弥陀仏なり
——『聖光上人伝説の詞』

目次

＜年頭所感＞

御題「母」に因みて……………	岸 信 宏 ……	(2)
乱世の宗教者法然上人を見つめて……………	林 靈 法 ……	(6)
年賀ハガキに憶ふ……………	宮 本 文 哲 ……	(8)
新春にひとこと……………	石 井 真 峯 ……	(10)

＜新春随想＞世相の鏡……………	壬 生 台 舜……………	(12)
-----------------	--------------	------

「初」行事の意義……………	宝 田 正 道……………	(20)
---------------	--------------	------

法 話

生かされて生きる……………	服 部 法 丸……………	(16)
私の正月……………	梅 田 潤 一……………	(26)
午歳を占う……………	今 枝 二 郎……………	(30)
浄土句集……………	一 田 牛 畝 選……………	(25)

お経のページ 金剛般若経……………	(33)
-------------------	------

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………	寺 内 大 吉……………	(37)
--------------------------	--------------	------

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

年 頭 所 感



御題「母」に因みて

浄土門主 岸きし

信しん 宏こう

○

昭和五十三年新年御歌会の御題は母と題せられてあります。私共にとって極めて身近かな御題であります。私は愛知県中島郡平和町の出身ですが、九歳の時に出家しましたので、父母の膝下にある年間も割合に少い方でした。教養を受けました和歌山県田辺市の浄

恩寺から東京の宗教大学に入学しまして、その往復に尾張の実家へ立ち寄ることとなりましてから、直接父母の慈愛に接する機会が多くなりました。実家は浄土真宗の東本願寺派に属する尾張門徒で岸姓の本家から三番目に分れた新家で、細々と農業を営んでいました。母は特に信心深い人柄で、私が帰省する度毎によく草餅をつくって下さいました。私

は母をしのんで、

ふるさとかえりみすれば草餅を

つくりたまへる母にてありし

という歌をよみました。この歌は今歌碑となつて実家の庭に建てられています。母は大正十二年五十八歳で亡くなり、父は昭和十三年八十三歳で亡くなりました。私は本年九十歳の高齢を迎えました。私をして仏道修行の道に向かわしめられた父母の恩恵に深く感謝せしめられると共に、特に母の信心深い慈愛の恵みを追懐するのであります。

○

我が浄土宗門は去る昭和四十九年に宗祖法然上人の立教開宗八百年の法要をすまし、来る昭和五十五年に高祖善導大師の一千三百年の大遠忌を迎えんとして、その準備を進めているのであります。大師の一千二百五十年の

時には昭和四年に大法要が行われ、その翌年の昭和五年五月に大師の遺跡、北支の大原の近くの石壁の玄中寺の址へ参拝の企画がありました。御入滅の地、昔の長安の都、今の西安の地の光明寺の址へは、当時では政状不安のために赴くことができませんでした。一行二十名が支那へ渡ったのであります。私もその内の一人に加わったのであります。仏教専門学校の教授時代でありました。大連の明照寺住職で支那開教区長の吉武堯雨師が一行の団長で、浄土宗務所の教学部長の柴田玄鳳師が副団長とし事務を取られました。当時の支那、中華民国十九年五月に神戸より船で青島に上陸しました。北京の西本願寺別院に於て日支合同の善導大師一千二百五十年の御法要を行うことができました。一行二十名全部が石壁の玄中寺址へ参拝ができると思って渡支したのですが、当時の支那の政状は北支には閻錫山が根拠を置き、南支には蔣介石が根拠を置いて、互に戦端を開いていましたので、



団体の内地旅行には制限が加えられ、私共一行二十名にもその代表者二名だけに内地旅行の旅券の護照が下附せられました。定恵苗師と私との二名が代表者に選ばれました。北京の西本願寺の輪番の光岡良雄師が案内と通訳とを兼ねて同行せられることとなり、一行三人が玄中寺の址へお参りすることとなりました。

○

その時の旅行記は一行の内の数名によって分担して「祖跡を訪ねて」という単行本として、時の宗務所より発刊せられました。玄中寺参拝の所は私が執筆しました。私の「培根録」にも収めてあります。随分苦勞の多い旅行でした。

そして、今回の善導大師の一千三百年の大遠忌に際して、記念に浄土宗日中友好協会というのが設立せられ、その企画のもとに大師の遺跡参拝の訪中団が、本年の十月に渡支することになっているとのことです。石壁の玄中寺も今の中共によって復興せられ、日本の東西本願寺、知恩院から曇鸞、道綽、善導三祖の絵像が寄進せられ、三祖堂が建立せられてあるとのことであります。交通の便もよくなり、太原より石壁まで自動車で行けるとのことです。今回は玄中寺の外に大師の御入滅の地、昔の長安の都の址、今の終南山光明寺の址へも参ることができるとのことです。大師の遺跡参拝の訪中団によって、日中仏教の親

善が深められ、両国間の平和が促進せられる
ことを祈念してやみませぬ。

全国浄土門のみなさまの新年のご多幸
を心からお祈り申し上げます。

「昭和戊午御題母謹賦」

少年得度淨因長（少年にして得度す、淨因長し）

老去偏思悲母芳（老い去って偏えに思う、悲母の芳しさ）

最是慈恩能哺我（最も是れ慈恩、能く我れを哺くむ）

一盆草餅味難忘（一盆の草餅、味忘れ難し）

年 頭 所 感

乱世の宗教者法然上人を見つめて



大本山百万遍知恩寺法主 はやし 林 れい 靈 ほう 法

○
過日、私は山口県の奈古で五重相伝をつとめさせていだいた。奈古から萩市へは車で十五分位であるので、午後の勧誡が終ってから車で萩の松陰神社に参詣をいたした。

すでに以前のことであるが、私は昭和二十五年から東

海高校長を十五年間つとめたが、当時三年生の修学旅行はどこも北九州の旅行であった。私は旅行に同行しては帰路によく小郡でおりて、まだ土ぼこのごつごつした道をバスで二時間半、萩の町に出て松陰神社にお参りをいたした、教育にたずさわる者として、吉田松陰先生の生涯は忘れぬことの出来ぬ尊いものであった。人間の教育を宗教者の立場から探求していた私にとっては、当時の

そして今日においても松下村塾の教育精神はまことに忘れぬことの出来ぬものだった。

まだ戦後とて淋しい神社のたたずまいで、境内には村塾の四畳半の幽囚室、そして八畳の先生の講義の部屋、十畳の塾生たちの控え室が、何やら世間から忘れられたような淋しい中に昔のままに保存されていた。それに、境内のたたずまいは戦後の荒れたままであって、それは松陰先生を思うと目頭のあつくなるような荒涼たるもので、裏日本の僻地として陰湿な様子を示していた。

ところが、今度神社へ行ってみて驚かされた。先ず、萩市全体がおどろくべき明るい観光の街と化していた。市内には、実に数多くの萩焼きの店がお客を相手に繁盛し、海岸べりには豪華なホテルが立ち並んで、夕闇み迫る頃には美しい明りを水面にいくつも投げているのである。土産物の店には、どこでもテレビで訴えられている。「花神」の大きな看板が、でかでかと掲げられている。

松陰神社には観光バスが数台乗りこんで、中々の騒々しさであった。しかし、松下村塾の歴史ある古い建物は、一般の観光の客には特別のそれという関心呼びおこすというでもなく、人々はただ無表情のまま通りすぎ

ていくのである。まことにどこもかしもが、観光ブームのありさまである。

○
私は帰路、車で萩から海辺に沿うたアスファルトの美しい道を走りながら、しみじみと想っていた。

村塾の若い少年たちが命がけで育て、創りあげて来た人間の魂も、祖国もいまはどこへか失われてしまつて、日本全土を蔽うているものは、華やかな平和といういつもの仮面である。いまの日本人は、この偽りの平和のぬるま湯の中ににんまりとうずくまつて、このぬくもりをいつまでも失わないようにしているのである。

こんなとき、私は乱世の宗教者法然上人を思うことまことに切なるものがある。松陰先生も乱世に処して本当に生きた人であり、仏法に特に関心を寄せられはしなかったか、その言動は浄土教の報土往生を説いた人であった。

○
法然上人は乱世に処して人間の生きる本当の姿をじっ

と勇氣をもつて凝視して、そこから本当の人間の生きる先を見出し、乱世に右往左往する日本人に導きの炮火を与えられたのである。いまの日本は政治経済に、教育文化にすべてが平和という軟弱な名のもとに安穩と墮落とに落ちこんでいるのである。どんなに自分の生きざまが恥ずかしからうが、生きのびることのみを求めて行くのである。

現代の平和という美名の仮相をぶち破ることである。塗りたくったわが身の仮面を勇氣をもつてはぐことである。人間の本当に生きることの根拠と責任を見出すためには、乱世的な人間となることである。いつでも、この乱世に生きる人間の眞の姿勢を失わざらんことこそ大切である。来る新しい年、私は乱世の宗教者法然上人を見つめて歩いて行こうと思う。



年賀ハガキに憶ふ

みやもとぶんてつ
大本山善導寺法主 宮 本 文 哲

○
私は去る昭和四十五年、喉頭癌を病んで声帯を剔出した。それ以後呼吸は胸に開けた特別な気孔からする。そのため冬期になると、時々血痰が出る。それで医師は避

寒を勧める。そこで此度は十二月からハワイに行くことにした。幸いハワイには四人の子供（男二、女二）が居るので、何の気兼ねもなく避寒が出来る。いよいよ行くとなると出発前に、年賀状の整理をしなければならぬ。整理にかかって見ると、何と喪中欠札の多い事よ。私は毎

年感ずる事ではあるが、その余りに多いのに驚いた。漢詩に、「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」と言うのがある。全くその通りだ。私は手元にあった大正大学発刊の、昭和二十八年の同窓会々員名簿を開いて見た。私は大正四年の卒業だがそこには同級生の名がずらり列んでいる。真野正順君、長谷川良信君、神谷秀瑞君等々皆なつかしい学友だが今は皆遷化している。私の同級生で今なお生存している者幾人ありやと思うと心は寒くなる。

因みに同窓会名簿に私の名は加納文哲となっておるが、私は宗大卒業後師籍に入って宮本と改姓した。

話は少し脇道にそれるが、昨年の九月、広島県呉市正覚寺の山県正美君が同志五人と共に当山に参拝した。色々話をする中同君が私の長男修哲と、大正大学時代同級であったとの事で、在りし日の修哲の事を色々話してくれてとてもなつかしかった。同君は帰寺後わざわざ修哲の写真を複写して数枚送ってくれた、その好意に深く感謝している。聞けば同君は山県家の養子であるとの事、養父の山県定光君は私の宗大時代の同窓生であった事も、不思議な因縁である。

それは兎に角私の長男修哲は、昭和十四年六月ホノールの高校を卒業したので、坊主にするため日本に留学させ、大正大学に入学、予科を卒えて加行けぎょうもすまし、一人前の和尚になった昭和十九年、学徒召集で入隊、フィリピンに出征して戦死した。時に二十二歳であった。修哲は終に父母の悲しみを後に「歳々年々人同じからず」の中に入ってしまったのである。

○

若きとて末をはるかに思ふなよ

無常の風は時をきらはず

この無常の風ばかりは、いつ、どこで、どういう風にやってくるかわからぬが、やって来ることは間違いない。この必然の宿命に対して吾等凡夫は如何に覚悟すべきか、実に大問題である。私は浄土宗の念仏者として宗祖の御遺訓に従い「唯一向に念仏すべし」であり、二祖のお諭しにより「念死念仏」すべきだと固く信ずる。終に臨み新年の御慶を申し上げ、倍旧の御交誼をお願いする。合掌



新春にひとこと

大本山光明寺法主 石井真峯

一

昨年は仏教界の批評が二、三目にとまりました。そのうちの一つの要点をここに書かせて頂きますが、雑誌に掲載されたものですから、お読みになった方も数多くあるかと思えます。それは東大助教授の伊東俊太郎先生の「仏教よ甦れ」という一文であります。先生は次のようなことを書いておられます――。

昨年夏旧軽井沢の大通りを歩いていたら、五十歳ばかりの外国人キリスト教伝道者が、たどたどしい日本語で

説教をしていた。内容はとにかく、その熱情に動かされ私もしばらく聞いていた。親鸞や日蓮が生きていた鎌倉時代には恐らく、これらの伝道僧が熱情こめて自分たちの宗教的信念を直接、民衆に語りかけていたのだろう。宗教は死者のためではない、生きたもののためである。迷える衆生の飢い渴いた魂の嚮道者として、日々の心の相談相手となって欲しい。私の近隣にもいくつか寺があるが、こうした日常的活動を行っているところは見当らず、一人の仏教徒としてさびしく思う。仏教の未来的使命を信ずればこそ苦言を呈したいのである（昭和五十二年七月号『大法輪』）。

二

今日は地方都市へ行っても車と人が往来に溢れているから辻説法は困難でありましょう。幸い仏教にはキリスト教にない、伝道のいい機会に恵まれている。檀家の非常に少ない寺では困難であるが、相当数の檀家のある寺では、この頃年忌法要を寺で営む場合が非常に多くなり、多数の人が集まるようである。従来のままの勤行式でも、和訳の勤行式でもよいから参詣者に持たせて一緒に拝読し、つとめて荘重に法要を営み、法要後短かい法話をするのが望ましい。法話をするのは得意でないと遠慮する方もあるかも知れないが、上手下手を問題にしないで実行して頂きたいものである。毎月何回ときめて法話をされている方も多数あることと思うし、電話を利

用して人生相談をやっている方、或は文書伝道をやっておいでの方も沢山あるようで結構なことと思います。葬式と法話なしの法要だけでは、伊東先生のような批評のあるのも無理ではないと思われます。

三

この頃の仏教系の新聞、雑誌には毎号のように東南アジア、インド、ネパール、スリ・ランカの仏蹟参拝旅行の勧誘広告が出ている。簡単に仏蹟参拝が出来るようになったのはありがたいことであるが、国際的礼儀を心得て、飛行機の中、ホテルなどで批判をされないようにしたいものである。礼儀に関する本は本屋にたくさん並べてあります。老婆心から一言つけ加えさせて頂きました。

年 頭

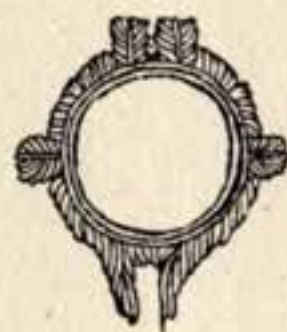
所 感

(新)
(春)
(随)
(想)

世相の鏡

壬^み生^ぶ台^{たい}舜^{しゅん}

(大正大学教授・文博
日本学術会議会員)



最近の世の中は住みにくいと時どき感ずる。二、三年前からロッカー捨児事件が増えて来た。もしもエイ児が考えることができれば、まことに住みにくい世の中だとなげくことであろう。大正から昭和にかけての時代には、捨児はなるべくきれいな着物をつけて捨られた。ミルクも傍においてあった。つまり、自分で育てたいが、いろいろな事情から、それができないので、誰かが自分に代って育てて戴きたいという母親の悲願がこめられていたようである。ところが最近のロッカー捨児は、ポリ袋か、おむつにくるんで、人目につかぬ処に捨ててゐる。しかもほとんど着物もつけていないそうである。つまり誰かに育ててほしいという気持は全くみられない。捨児しなければならぬ母親にも事情あつてのことだろうと察するけれども、どうにも我慢のできぬのは、子供のいのちを考えないようなやり方である。それはどうにも納得できない。また最近是人質事件が増えて来たようである。或る日突然に全く無関係な人たちを人質にとつて、自己の要求を入れさせようというのがねらいである。全く悪質極まる事件である。航空機ハイジャック事件あり、バスのつとり事件乃至、旅館の従業員の入質事件等々がある。また



爆破事件というのものもある。ある会社や団体のやり方が不届であるという理由で、人目のつかぬ場所に起爆装置をしかける。そしてたまたま通りかかった第三者や、その場に居合わせた直接無関係な人びとを殺傷する。経典にいう澆季末世かと悲しくなる。一方では人間の平均寿命が延びるに従って、自殺者が増える傾向がある。こんな一連の出来事を結びつけて考えると、人命不尊重の時代かと思うこともある。

自然科学が進んだ結果、世の中が便利で、早くなり、大量生産が可能になった。その反動として「物を大切にすること」を忘れようとしている若ものが多い。私は二年前に中国の仏教会の招待で、各地をみる機会にめぐまれた。その時ある中国人にこんなことを聞かれて困った。日本は資源が乏しく、他の国のエネルギーや原材料を使っているのに、テレビのチャンネルが1、3、4、6、8、10、12と七つもある必要は何か、またティッシュペーパーを使って、机をふいたり、車のシートを拭う。どうして布を使わないのだろう。と言われて、ドキンとした。仕方がないので、商業ベースに社会が動かされているせいでしょうと答えた。中国人は鼻布れを使い、紙の無駄使いを慎んでいる。

物がたやすく手に入るから物の価値を軽んずるのは、需要供給の経済法則から来るのかも知れない、生命の軽視も、平均寿命の延長と関係があるかも知れない。「少ないものを大切にし、短かいいのちを愛しく思う」と全く正反対な現象である。こんな中で、九月の日航機ハイジャック事件に「生命は地球よりも重い」という名言付きで解決したのは、あの時点では正しい処理方法であったと思う。

だが事件から救われた人びとの感想の言葉を聞いて、割り切れぬものを感じた。あの突然の出来事で生命の危機に巻き込まれたので、助ってよかったと思われる点は皆同じであった。



その割りには犯人に対する激怒は余り見られなかった。さらに十六億円の邦貨と大変な犠牲を払って助けられた自分のいのちをどう生きるかという反省の言葉が一つも聞けなかったのは残念である。そこでいのちも大切なものであるが、そのいのちをどう生きさせるかということが実は大事なのである。身体の弱い人は頑強な人より長生きをするそうである。いわゆる一病息災であって、無病息災ではないといわれる。弱い人は生きることのむずかしさを日々に体験しているので無意識にも気をつけながら生活し続ける結果であろうと思われる。また順調な境遇でない人生経験をした方のほうが他人に対する思いやりがある。つまり自分自身で困った経験がある方が、人間性が豊かになるというわけであろう。

「得難き人身を得、聞き難き仏法を聞いて」どうしなければならぬのかというわけである。「この身今生に度せずんば、何れの生においてかこの身を度せん」という目的意識が問題なのである。中世は封建社会であり、近世になって自我の発見が行なわれた。これは正しく人類の思想革命である。そして個性の尊重される時代となって来た。その結果、価値観の無様化時代になった。その影響は服装や髪形にもみられる。一見、男だか、女だかわからない人びとが増えて来た。男は男らしく、女は女らしくという言葉を知る我われには、理解できない社会現象の一つである。男とは何か、女とは何という議論ではなく、素直に男は男らしく女は女らしくあってほしいというだけである。この論理を延長すれば、人間は人間らしくあってほしいということになるわけだが。

何処かで、何かが間違っているのではないかと思われる。つまり「自我の発見」ということは自己の発見と共に「他我の発見」である筈である。自分だけ認めて、他人を認めない人は「地球は自分のために廻っている」と思い込み、道路は自分の車のためにあるのだとの錯覚が



生れる。

私は去年九月頃の新聞で、妙に印象に残る記事があった。一つは、九州の小倉の食堂経営の夫婦と奥さんの弟との三人で、ヨット世界一周をしたというニュースである。しかも二年半かったというから大変な大事業である。さらに驚いたのは食堂を売ってヨットを買ったから、帰国した後に住む家もないというである。余りあと先きの分別では出来ない冒険であるが、その思い切りの良さには仲々ついて行けないものがある。しかしそれだけの実行力の持ち主だから、帰国後の生活設計を立派にやりとげるだろう。

もう一つの話は、東京の小石川の岡田医師の奥さんの逮捕である。ご主人はある医大の講師でもあり小石川で開業している。しかも二人の子供は学習院に通学しているほどの恵まれた境遇である。それが虚栄のために宝石で身を飾り始めたが、そのエスカレートの結果、やくざのからんだサギ事件の主演となってしまったという。人間の欲望の恐ろしさを教えるような実話である。ヨット世界一周旅行は他人に迷惑をかけないから、自己の欲望の充足として認められようが、宝石サギ事件は、エスカレートした欲望のなれの果てという感じである。現代は欲望が作られる時代であり、開放された欲望のうず巻く社会なのである。

鏡が作られ、普及されてから、人間は美しくなったという。つまり、自己の顔形を写すことによって外見のみにくさを直したからである。私は内なる自己を写し出す必要があると思う。神仏とは正に自己を写す鏡である。鏡の普及に外なる自己に気をとられた人間は内なる自己を忘れ勝ちになっている。なぜか哲人の言葉を引いて、恰好よい説明を書く気になれなかった。たので、敢えて愚老者のことばを綴った次第である。

二 法 話 二



生かされて生きる

服部 法 丸

(總本山知恩院布教師
大阪・西寺町法界寺住職)

永劫のしじま破りて呼び給う

仏の声か 除夜の鐘 鳴る

昭和五十二年の終えんを告げ、新しき昭和五十三年の幕あけを知らず除夜の鐘。私達はこの鐘の音を仏の呼び声と聞き、三毒煩惱を除くべしとのみ仏のお慈悲のみ声と受取らせて頂くべきでありましょう。

過ぎし昭和五十二年。それは毎日が迷いの生活であり、み仏のみ心になわぬ日々で御座いました、と自らを懺悔するとき、除夜の鐘の音が仏の呼び声として心に響いて参ります。

大晦日と元日とは別に風物が一変する訳ではありませんが、何となく元日の朝はすがすがしく天地万物がいきいきと感じられますのは、私共一人一人の胸に「今年こそは」との決意があるからでありましょう。しかしこの決意もいつの間にか「三日坊主」となり、「中だるみ」となりとうとう「尻きれとんぼ」となって、元日やまたうかうかのはじめかな、と自嘲するのが実情の様であります。

お釈迦さまのおことばの中に「初めも善く中も善く終りも善かれ」ということがあります。現実の営みは仲々その様には参りません。元日に決意したこともついつ

い忘れ去られて行くものでありますが、お釈迦さまは、こうした私共の弱点を知っておられたればこそ、この親切なおことばをお示し下ったものと思われます。

俗に「し、ふ、つ、ち、ゆう」と言うことばがありますが、これは漢字では「始、中、終」と書くものではないでしょう。始めも中程も終りもということであり、いつもということでありましよう。元日の決意を始中終に持ち続けて「今年こそは」とお釈迦さまの御期待に応えたいものであります。

しかし終りを善くせんと欲すれば大切なのは中を善くすることです。いかにスピード時代とは申せ全くの「中だるみ」ではいかに元日に立派な決意を固めても決して終りは善くなりません。元日の決意を日常の生活の上にいつも心得てこそ、有終の美を飾ることが出来るものであります。

除夜の鐘をみ仏の慈悲のお声と聞かせて頂き「今年こそは」と日常生活の上にこの感激を生かして行きたいものであります。

○

昨年私は招かれてある町の太平洋戦争戦没者合同慰霊祭に参加させて頂きました。法話の終了後、一人のご婦人が控室に訪ねて来られてそのご婦人より半紙に包んだ金平糖を頂きました。「有難うございます。」と申しますと、そのご婦人が「申しかねますが、その金平糖を一粒おさがり下さいましたら、吉田正義追善菩提と申して頂けませんか。二粒おさがり下さいましたら南無阿弥陀仏とお念仏をお願い致したいのですが」とおっしゃって、その訳を次のように話して下さいました。

「私には息子がいまして吉田正義と申しました。太平洋戦争もたけなわの昭和十九年一月三日、正義は学徒動員で入営致しました。日ならずして一通の軍事郵便が届きましたが、その中に『お母さん喜んで下さい。私は選ばれて機関銃手になりました。元気で頑張っています』とありましたが、二回目の便りは遠い遠い中支からでございました。

この正義は立派なからだをしておりましたが、いたって真面目でお酒も煙草も吞みません。しかもこの子が厳しい軍隊の新兵生活の中で一番楽しみにしている時間がありました。それは夜になって毛布にくるまる時でし

た。当時は軍隊とても大変な食糧不足で、正義は乾パンを常食にしていたようでしたが、その乾パンの袋の中に三つ、四つの金平糖が入っているのです。甘党のあの子はその金平糖を大事に大事にとっておいて毛布にくるまった時にそれを食べるのです。一粒口の中に入れて奥歯でユツクリと噛みしめて、この金平糖の甘さを通して祖国の私を思い出して呉れておったようでございます。窓の外は大陸の嵐が吹き荒れていても、その時ばかりは正義の心は故郷の私の下へ帰って来ておったのでございます。

しかし或る日のこと、この正義のただ一つの楽しみも奪われてしまいました。上等兵さんの命令で『金平糖は全部上官に差し出せ』とのことでございました。たった一つの楽しみも奪われてあの子は毛布の中で、『金平糖が食べたいナー』とさぞ辛い思いをしたことでしょう。

昭和十九年八月二十一日午後一時頃に敵が突然に攻めてまいりました。味方は極めて手薄で夕方の頃になりますと全滅の一步手前でありました。『もはやこれまで』と全員が決意したとき、嬉しや、味方が応援にかけつけと呉れました。戦友の仇討とばかり勇み立ちます正義

は、機関銃の銃身も焼けよとばかり先頭に立って戦っておりましたが、悲しや一発の迫撃砲の弾丸がこの正義のすぐそばで爆発致しました。『アッ』と叫んであの子は倒れましたが、見る見るあたりは血の海でございます。迫撃砲の破片が正義のおなかを切り裂いたのです。出血の為にあの子は意識がうすくなりましたとき、戦友がかけて寄って抱きおこして呉れました。『吉田！　しっかりせいよ。死ぬなヨ』。この声に正義は気がついたのか、最後の力をふりしぼって目を見開いた。そしておりから大陸の西の空を真赤に染めて沈んで行く太陽をジット見つめ乍ら一こと、『お母さん』と私の名前を呼びました。そして消え入る様な小さな声で『金平糖が食べたいナー』これが陸軍二等兵吉田正義の最後のこととなりました。

やがて正義が戦友の胸に抱かれて無言の凱旋を致しましたが、その遺骨を追いかける様にして隊長さんから戦死の詳報が届きました。それを読んでから今日まで私は甘いものは一切口に致しておりません」とこの奥様がおっしゃるのです。

「私も甘いものは好物ですが、あの正義が大陸で、私

の名前を叫び乍ら、『金平糖が食べたいナー』というて死んで行ったかと思うと、私は甘いものは口に出来ませんでした。そして、昭和二十一年八月二十一日のあの子の三周忌の時に、やっと手に入った金平糖を、仏壇のお位はいの前に供えやり、『正義、金平糖ですよ、お母さんが見てあげるから、たくさんお上り』と呼びかけてやりましたら、仏壇の奥の写真がニッコリとほほえんでおりました。昭和二十四年以来この町ではずっと今日の様に合同慰霊祭を行って頂いておりますが私は欠かさずに参列しております。そして、お話しをして下さった布教師の先生に、正義の追善の供養にと、金平糖をさし上げております。七回忌の時は七粒。十三回忌には十三粒。先生、只今お供養致しました金平糖は三十三粒ございます。今年はくしくもあの子の三十三回忌。お願いでございます。この金平糖を一粒おあがりになったら、俗名吉田正義追善菩提とあの子の名前を呼んで下さい。二粒目には南無阿弥陀仏とお念仏を申してやって下さいませ」

○
私はこのご婦人のお申し込し通りに致しましたが思わ

ず目頭が熱くなりました。

今日の日本では金平糖はそんなに貴重なお菓子ではありません。もっともおいしいお菓子が街に満ちあふれております。然しこんなに豊かな平和な日本の国を造る為に、三十三年前遠い大陸において、母の名を呼び乍ら、金平糖が食べたいナー、と散って行った尊い命の犠牲には泣かずにおれませんでした。大陸で南海で幾百万の同胞の尊い命の犠牲があつたればこそ今日の日本があることを忘れてはなりません。

人間は決して自分の力で生きるものではありません。自分以外のすべてのものの力によって人は「生かされる」ものであります。この私を生かして下さる大きな力を、私共は素直に「アミダ様」と拜んで行き「おかげさまで」と受取らせて頂くのでございます。「生かされて生きるこの身を知れ」と除夜の鐘は永劫の闇を打ち破つてみ仏のみ声として心に響いて参ります。

年改まり万物新生の氣に湧き立ってき、今年こそはこのみ仏の呼びかけに応えるべく、始に覚悟し、中に努力し、終に喜からんと新年に期したいものであります。

「初」行事の意義



たから だ まさ みち
宝田正道

(浄土宗出版事業協会主幹)

一

正月の想い出はなつかしい。歳の瀬が迫るにつれて暮れのうちから「もういくつ寝ればお正月」などと歌って、指折り数えながら楽しみな元旦を待つ子どもたちの心は、まことに無邪気そのもので明るくほほえましい。もう五、六十年も昔になろうか。大正末から昭和の初めにかけて生れ育った私などは、正月がくると、待ちかまえていたように、タコ揚げやカルタとり、双六、羽根つき、コマ回しなど、いわゆる正月独特の伝統的な遊びをして、結構楽しんだものだ。そして晴着を着て近所のお寺や神社に初詣でにつれていってもらったり、年賀の挨拶

拶にくる親戚の人や親からお年玉をいただいたりすることとが、まるで当然な、子どもの特権みたいに待遠しくてうれしかった。街には家ごとに松飾りがつけられ、日の丸の旗が軒ごとに風に靡いて晴れがましく、道行く人の数も、たまに年始の振舞酒に酔った連中が赤い顔をして通りすぎるほかは、まばらで、年若い女性が晴着を裾を気にしながら三々五々つれ立って歩く姿も、いつになくのんびりとおしとやかな風情である。「ほのぼのと犬四五匹や門の春(竹冷)」という詩情がびったりの三カ日が多かった。

また、台所では朝早くから雑煮を煮る湯気がガラス戸越しに白くほのかに立上り、かすかに餅を焼く匂いも流

れて、ふだんとは全く違ったお料理が食膳を賑わすという点で、子ども心をときめかすのであった。

正岡子規は、このような正月の風光を、次のように描いている。

初日の影は、九尺二間の隅々まで照して、はきだめの塵も陽炎と燃え上り、松竹の飾り八十余州到る処に立て並べて、北風やや東の方より吹きつくる昨日今日、いづくはあれど日の本の三ケ日、のどかに神の御末の榮え行く有様こそ、たふとけれ。

いかにも古い明治、大正頃の時代思潮と街並がうかがわれる。「神の御末」などの表現も、「神州日本」と呼んで軍国主義のお先捧をかついだ、いかにも半世紀前らしい筆の走りである。

現代の若い人々は、以上のような正月風景を推察してみても、子どもだましのような伝統に忠実な、昔の日本人の幼稚さ加減を笑うかもしれないが、戦争もなかったかわりに公害もテレビもなかった時代のことである。遊び一つをとってみても、タコを揚げたり羽根をついたりす

るだけの場所があったということで、それだけ自然に恵まれた、静かで平和な正月を迎えられた時代もあったんだ、というふうには理解してもらえればよい。

しかし、時の流れが半世紀もたつと、世の中こうも違うものか、と今度は逆にわれわれが驚く番である。

日本に限っていえば、乾坤一擲の大戦争に敗れて「神国」は壊滅し、自由を謳歌する民主主義の世に変わってから、すでに三十回以上の正月を迎えた勘定である。それにもかかわらず、いや、それならばこそ、といったほうがよいのかもしれないが、戦争こそないものの、世の中はいつもなんとなく騒々しい。三月開港という政府宣言に抗して、成田空港をめぐる三里塚の攻防はいよいよ激しさを加え、各種公害をめぐる訴訟は、暗い火花をあちこちに散らしながら、いつ果てるともわからない。何か新しく事を始めようとする、必ずといってよいほど、すぐに反対の狼煙が上って、中央と地方とを問わず、人々は常に党を組んで牙を向けあっているような表情である。これでは平和で静かな正月を迎える余裕もなからう。

反面、テレビをはじめ科学機器の進歩と普及はめざま

しく、生活様式は全般にわたってあつという間に遅しく大幅な成長と変貌をとげてしまった。子どもたちの正月の遊びも食べ物も、昔とうんと違ってきた。都会では、もうカルタや双六など時代遅れで、テレビ・ゲームが主流となりつつある。餅を食べる子も少なくなった。大抵は、正月といえども好きなハンバーグなどのパン食か即席ラーメンの類で過す。昔の人が生活の知恵をしぼって考え出した、祝いの意味をこめたしきたり料理など、糞喰えといわんばかりで見向きもされない。万事、科学的、実利的でさえあれば足りる、という洋風文化に染った風潮のあらわれであろう。同じ意味で、門松や国旗を立てる習俗も、官庁や大手商社が儀礼的宣伝と社交のために行うにすぎず、一般家庭では次第に影をひそめようとしている。

二

こうした世風の大変革の中であるが、それでも正月は毎年やってくる。そして、昔ながらの言葉として「初」の字をつけた正月行事を押売りする。「初日の出」「初詣で」「初荷」「書初め」「出初め式」など、馴染み深いも

のだけでも相当ある。この他、「初午」「初水天宮」「初薬師」「初天神」など、神社仏閣で行う初行事は無数とあってよい。つまり、時代は変わっても正月行事に「初」をつけて祝い慶ぶ習慣は、依然として健在である、ということである。

一体、この「初」とは、そもそもどういう意味で、なぜめでたいのであろうか。

大ざっぱに分けると、「初」は「はじめて」という意味と、それだけで「新春、正月」という意の二つがある。正月に行われる「初」行事は、当然後者の意味で始められたのであろうが、近頃はどうも前者の意味が強く、ここに一つの問題がある。しかし、いずれにせよ、正月に初めて行われることが、なぜそんなに祝い慶ぶに値するのであろうか。

科学的にいえば、元旦を迎えたからといって、天地の運行や人間の生活が、にわかに様変りを起したわけではない。人間が暦というものをつくって、竹の節のような区切りをつけようとしたままで、地球は相変らず黙って自転をつづけ、時は休むことなく刻々と歴史を刻んでいる。具体的にいえば、大晦日の夜、「紅白歌合戦」や

「行く年来る年」の視聴を終り、年越しそばなどに舌鼓を打って寺々のつく百八の除夜の鐘をきいているうちに、時計の針がちょいと動いて十二時を回ったとたん、人々は新しい年に入ったといつて「おめでとう」という。テレビなどで見ていると、この一瞬に、顔は同じで服装だけ新春めいたものに着換えたタレントが、まるで世の中が変ったみたいな表情で挨拶をする。一夜明けただけにすぎず、人相も同じくせに、いわゆる正月の顔になるわけである。思えばふしぎである。

しかし、これは新春の自覚に伴って、その人の心が引締つたのである。逆にいえば、人が心を改めれば、まわりのものがみな違つたように映るということである。

このように、「初」は、去年までの古い殻を脱ぎ捨てて新しい姿に生れ変わり、文字どおり改心するところに意味がある。だから、「初」は単なる「はじめて」とか「一番はじめに」というだけではなく、そこには今年こそ旧年と違つた真剣さで取組もうという心の誓い、あるいは新しい出発点に立つという覚悟が、色濃く裏打ちされていなければならない、といえるだろう。

相撲界は特に縁起をかつぐことが多いが、よく「初場

所」の「初土俵」、ことに「初日」に黒星を喫すると、年間ずっと負けがこむ、とつて「初日」の勝負には、それこそ決死の覚悟で臨むという。しかし、これは何も相撲の世界だけの話だけではない。人生万事、「初」の心がけが大切である。失敗が続いたときなど、「切心に返れ」とか「初心忘るべからず」といういましめの言葉を噛みしめて、反省の材料とするのもそのためである。正月は年のはじめであるから、「初」を冠して、より慎重で、向上心に富んだ一年への門出を祝うのである。だからめでたい。

三

近頃、また初詣でがさかんとなり、正月休みを利用して海外旅行としゃれこむ独身貴族や恵まれた新婚のカップルも多い中に、若い人々で各地の神社、仏閣にお参りする人の数が、うなぎ上りにふえつつあるという。何も知らない外人が見たら、日本人はなんと信仰心の厚い国民なのだろうか、と目を丸くして「ワンダフル」を連発するに違いない。

しかし、この光景は、はたして信仰心のあらわれと見

ていいのであろうか。私にいわせれば、それは表面から想像した皮相な見解であって、ふだんの彼らの言動から考えれば、とてもそんな殊勝な敬神熱から出たものであろうはずがないことだけはたしかである。よしんば神詣での形はとっているにしても、彼らの心理は少くとも、「初」を忘れた、単なるお祭騒ぎ的な遊山気分の外出というにすぎないのではなからうか。

ともあれ、初詣で客も含めて、とかく現代人は、「初」の本義を忘れて軽く「はじめて」「一番先に」という意味だけに傾き、形式的に「初」を冠した行事を行いがちである、とはいえるであらう。

すでに前述したように、「初」は心の持ちよう如何で意義が変る。人間は、ふだんの心を鏡に写せば、さぞや醜い姿であらうが、元旦あるいは正月だけは、一歩進んだ美しい、真新しい形でありたいものである。心改まるとは、そういう形になった時をいうのである。そうでなければ、いくら年の始る一番先に神仏へお参りし、若水を汲んで書初めをし、雑煮を祝って口先ばかり「おめでとう」といったところで、決して初を弁えたためたさとはなりえない。それは、ちょうど新調の服や靴を初めて

下ろして「お初」と喜ぶ子ども心と変わらず、「初」の本義は泣くのである。

今年も新年を迎えて、一つまた歳をとる。一休禪師は「門松や冥途の旅の一里塚」と喝破して、骸しやれこらべ骨を竹竿の先に掲げながら正月の街の人々に警告して歩いた、というが、まことに一面の真理をついた行為である。新しく年を加えることに生きとし生ける者はすべて一歩死に近づくわけだから、「めでたくもありめでたくもなし」ということになる。

しかし、それでも人は、そんなことを想うだけでも不吉だといって、せつせと正月飾りをつけ、晴着の初姿で諸行事に「初」を冠して「めでたさ」を自分にいいきかせようとする。それは人が、生きるいのちをいとおしみ、少しでも長くこの世に住み続けたいからである。元旦や松の内に、それでも不幸、忌の貼紙を門口に出さねばならぬ人もあり、そんな家の前を通るたびに、だれでもひしひしと無常の風が時を選ばず吹き抜けてゆく身邊のうそ寒さを感じるのである。だからこそ、現世の非情に背を向け眼をそらして、自分だけは死なないぞ、とばかり、正月を祝いほほける気分になるのかもしれない。

浄土句集

選者 一田牛畝

東京 鈴木葉子

べったたらに江戸の香りの今もなほ

評 べったたら市は夷子講市、浅漬市とも言

う。二十日夷子の前日十月十九日東京日本橋の恵比須神社を中心に市が立ち夷子講に用いる土焼の恵比須、大黒や機鯛などを売る市が立つ。その時浅漬大根に麴のべつとりついたものを売り出すのである。それを買った人が「べったたら、べったたら」と言いながら人込みを歩く。この日は麴を衣服につけられても文句が言えぬ風習である。それ故浅漬のことをべったら漬と呼び、この市のことをべったらし市と言うようになった。明治の末頃までは浅漬はこの市まで売り出さなかったから、みんなこの市を楽しみにして買いに出たので賑ったわけである。私の句に

「江戸情緒残る鬼灯市に来て」と言うのがあつて目を楽しまして呉れるが、この句は口を楽しまして呉れるものである。

江戸の習慣行事も段々消えて行く中に、浅草観音の鬼灯市やべったらし市が今尚行われていることは東京の人に取って此の上もない懐しいことに違いない。作者はすべてのものが近代化され、なつかしい風習が消えて行く中に江戸の香りを楽しんで残したい一人に違いない。

東京 栗原やえ子

表札は亡き夫のまま門火焚く

愛知 伊藤 新三

小春日や縁に腰して浄土読む

福岡 高良 慈風

大珠数を繰る習わしの十夜かな

福井 田中 栄

水打って棚経僧を待ちにけり

福岡 増谷 雄鳳

冴えわたる空に光れる星一つ

愛知 渡辺 杜水

巡拝の伽藍をわたる廊涼し

京都 安藤 寛

千両を鳥に許して切り惜しむ

熊本 蒲生 蒲人

蜂あそぶ懸崖菊は大臣賞

神奈川 百武 きえ

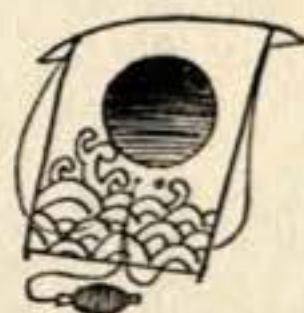
ふる里の川さらさらと曼珠沙華

東京 坂入 葉達

神棚達磨納めて年暮るる

祖師法語あり有難き初暦 一田 牛畝

私の正月



梅^{うめ}田^だ潤^{じゆん}一^{いち}

(詩人)

冷い、肌を刺すよのな北風をうけて、わたしは立っていました。すでに年が明けて数時間が過っています。わたしの前には、まだ明けきらぬ星をちりばめた紫色の空と、白い波飛沫を見せる大きな海が。そして、後には黒く、異様な怪物のごとき山々が連なり、その向うに、あの見なれた富士の山が来たるべき朝陽を待ちながら、黒々と星を背負って立っていたのでした。

わたしは生まれて始めての初日出を見に来ていたのです。いえ、日の出を見ること自体が生まれて始めてのことでした。もう数十年も前の、わたしが小学生だった頃

のことです。父に連れられたわたしは、寒さにふるえ、眠むたさに目をしょぼしょぼさせながら、じっとその時の来るのを待っていました。

やがて、待望の朝陽が乳白色のヴェールをゆっくりと剥ぐように昇って来ました。わたしはその瞬間、寒さも眠むたさもすっかり忘れて立ちすくんでしまったのです。陽光が世界を一変させてしまうのではないかと思えたのでした。

空は、その宇宙の大きさを示すかのように、青く、高く、そして大きく拡がりはじめ、その下で海が金色にキ

ラキラと輝いているのです。わたしはしばらくの間、瞬きひとつできずに眼をみはっていたのではないかと思ひます。わたしは自然の素晴らしさ、美しさを見たと自分にいい聞かせたのです。そして、わたしがその感動を父に知らせようと後を振り向いた時です。それまでの何も彼もがまるで嘘であつたかのように、わたしの眼にあるひとつの光景が入つて来たのです。それは富士山でした。雪をかむつた富士が、西の空に残るいくつかの星のきらめきをバックに、まるで生娘が初めて男を見たときのように、肌をピンク色に染めて立っていたのです。

わたしは、ただ驚いていたといえはいいのでしょうか。その時のことは何もおぼえていません。いえ、どんなに思い出そうとしても、その時のわたしは全身が眼になつていたような気がしてしまうのです。瞼の裏にその光景をしっかりと焼きつけていたのです。

わたしは、それから何度もこの光景を見ようと、人にせがみ連れられ、または一人でこの場所に来たものでした。しかし、二度と同じ光景は見る事ができませんでした。曇っていたり、雪がふらなかつたり、また星が見えなかつたり……。しかし、わたしは今では、それで良

かつたのではないかと思つてゐるのです。行けばいつでも見られるようなものなら、きっとその光景にも見あきて無感覚になつていたのでしょうから。

これが現在わたしに残っている、自分で誇れるただ一回きりの正月です。あとは何処の子供とも同じように、お年玉をもらうことや、コマ回し、またはもらったお年玉で何か買うことで過す正月だったような気がします。

しかし、それも中学から高校時代まででした。それからのわたしの正月は、わたしがひねくれてしまつたといつていいのでしょうか、目出たくもなく、明るくありませんでした。いえ、今では正月が来るのが恐ろしいとさえ思つてゐるのです。それは、わたしがわたし自身という人間に気づき、目覚めたからではないかと思うのです。しかし、いくらこういつてゐるからといって、わたしの正月が暗い、何処かじめじめとしたようなものであつたかという、そうでもありません。外面的には普段の、そして何処の誰とも同じような正月でした。わたしは会う人ごとに笑顔を作り「お目出とうございます」と、いいましたし、また自分一人でおとそに酔うこともありました。わたしが正月を恐しいといつたのは、正月

になると、まるで習慣になってしまったかのように、わたしを否応もなく責めつけてくる、わたし自身という肉面的なものが現われてくるからです。

あつ お前はなにをして来たのだと……

吹き来る風が私に言う

これは中原中也の「帰郷」という詩のいくたりです。高校時代、ちょうどわたしが人生というものを考え、悩み始めた頃、わたしはこれを読んだのでした。

——ああ、ぼくはいったい何をしようとしているのだろう。何かをしたい。ぼくという存在が燃えつきてしまふような何かを、そして、それに自分の全人生をかけてみたい——。

こんなことを思い考えていた時でしたから、この中也の詩は、強くわたしにうったえたのです。

——このまま歳をとっていったら、ぼくもこの中也の詩のように『ああ おまえは何をしてきたのだ……』というような人生を送ってしまうのではないだろうか。考えると居ても立ってもいられないような気がする。あせ

る。何でもいい、がむしゃらにやらねばという意識が強くぼくを刺激する。絶対に後悔するような人生は送りたくない。いや、そんな人生を送ってはいけないのだ。ぼくは、ぼくが死ぬ時、死の床に横になりながら、集まった人々に大声で笑いながら、もはやこの世にはぼくのすることが何もない、といって死んでいかねばならないのだ——。

高校時代の日記の一部です。わたしのこの頃は、毎日このようなことを考えていたのです。

正月とこの中也の詩とは何の関係もありません。しかし、正月になるとわたしはこの詩を思い出してしまふのです。「ああ お前は……」。普通なら暮れにその年の反省をし、正月には満ち溢れる希望と夢が、そして「今年は何々をやってみよう」と強い誓いをたてたりするものです。もちろんわたしにもあります。あるから困ってしまうのです。正月、コタツに暖まりながら、少々酔っぱらってテレビなどを見ていると、「ああ お前は何を……」と、わたしの中のわたしが呟くのです。まだ何の計画も誓いもたてていないうちから、わたしは悩まされてしまふのです。これまで正月にたてた計画を、ただの

一度もやりぬいたことのないわたしであるのに、すでに毎年の恒例になってしまった中也の詩が、わたしを急立てるのです。できそうもない計画をわたしはたてなければなりません。弱い弱い意志薄弱なわたしですから、どうせ今年も駄目だろうということは分りきっています。しかし、何か計画しなければ落着かないわたしが、またいるのです。

誰もが明るく楽しい気分で過す正月を、わたしは悔いと惨さにひたりきって過さねばならないのです。

しかし、この気持もわたしの中では、実にカラッとしたものになっているのです。それは長い間この中也の詩と同棲し、すっかり慣れ親んでしまったからなのでしょう。うか。それとも、誰もがわたしと同じようなものではないか、とわたしの心の何処かが人間をあざ笑っているからなのでしょう……。ともかく、今ではこの中也の詩が、わたしを正月を迎えたという気持にさせてくれるのです。そして、できないことを知りながら、わたしは今年もあるひとつの誓いをたてました。「今年こそはやりとげてみよう」という一見強い意志と、「また駄目だったではないか」という来年の正月のために……。

＝好評発売中＝

松濤弘道著

『仏教的生き方とは？』／浄土選書1✓

新書判 二六八頁 価四八〇円

石上善応著

『仏像——その語りかけるもの』／浄土選書2✓

新書判 二一六頁 価四八〇円

藤井実応著

『善導大師——生涯と金言』／浄土選書3✓

新書判 一八九頁 価四八〇円

発行所 浄土宗宗務庁

取扱 浄土宗出版事業協会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4

TEL〇三(四三六)三三五一代



午歳を占う

今^{いま}枝^{えだ}二^じ郎^{ろう}

(大正大学専任講師)

「天を行くは竜にしくはなく、地を行くは馬にしくはなし」。古くからいわれているこのことは、現実の生活の中で果たしている馬の役割の大きさを物語っているということができよう。

午どしの午は周知のとおりウマであり、自然に動物の馬が連想される。午はもと穀物をつく^{きね}杵^{きね}のことであり、後世発音の類似と意味の派生から、午が馬として用いられるようになった。

午どしに因んで想起されるのは所謂丙午である。丙午の女性は敬遠されがちであるが、なぜそのようなことになったのであろうか。丙はいうまでもなく火であるが、火は丙だけでなく丁もそうである。然し丁巳を忌むという話しは聞かず、火と馬とのつながりから忌まれること

になったのであろうか。一説には八百屋お七が丙午の生れであったことに由来するといわれているが、思うにそれは忌む風を強めたには相違ないとしても、そこに由来があるとはいいい難い。ただその風が今なお根強く残っていることは出生の統計によっても明らかである。

馬の勇ましさが丙午に若干なりとも関連ありとするならば、天馬空を行くということばは、その一面を表しているといえるであろう。天馬、竜馬などというのは、馬を伝説的に表しているものであるが、馬から受ける印象をかく表現したと解される。丙午に対する解釈が馬の躍動性に求められるならば、丙午生まれの女性を忌むより、未来への発展、飛躍の期待される女性として慶び迎えるべきではなからうか。

馬の勇ましさを説明するものとしては『説文』に「馬は怒なり。武なり」があり、天馬を述べたものとしては『漢書』に用例が多い。『漢書』の「天馬來たる。西極よりす。流沙をわたり、九夷服し、天馬來たる」と天馬を歌いながら自らの徳が四方に及んだむねを述べているくだりは、馬の高く評価されている話として興味深い。天馬とともに神馬も貴ばれている。『孝経援神契』には、「徳山陵に至れば、すなわち沢に神馬を出だす」とある。天馬・竜馬・神馬に共通な点は馬が徳と結びついて、徳に感応して馬が現れるということである。そもそも竜馬というのは元来が神秘的であって、伝説によれば竜馬が図を背にして黄河から現れ、これが易を導き出すもとなつたという。竜馬は馬そのものではないが馬の神秘性を竜馬を通して見せていることになる。天馬・竜馬と馬に天や竜が冠せられるのは、大地を走るのに地面に足が触れない姿からの連想で名付けられたと思われる、周の穆王の馬が足に地を触れずに走り、崑崙山に西王母を訪ねたというのも同類に扱えよう。また徳に感応するということの変形としては、晋の司馬休之が敵に囲まれていたとき、敵襲を乗馬が気づいて跳んだりいなな

いたして休之に急を知らせ、事前に脱出できたという話がある。

天馬・竜馬・神馬と対照的なのは驚馬である。その驚馬を角度を変えて対応させると名馬であり駿馬である。あるいはこれに良馬を加えることもできよう。良馬を話題として出せば当然韓愈の「雜説」に説かれた伯樂と馬との関係が想起されるであろう。伯樂の著名な話題としては『列子』に秦の穆公との対話で登場しており、その対話の中で伯樂は次のように言っている。「良馬は形容筋骨もて相すべきなり。天下の馬は、なきがごとく、かくるるがごとく、亡きがごとく、失するがごとし。……臣の子皆下才なり。告ぐるに良馬をもつてすべきも、告ぐるに天下の馬をもつてすべからず。臣にともに共に薪菜を担いまいし所の者九方臯有り、これその馬における臣の下にあらざるなり……」。ここで推薦された九方臯という人の見たてた馬が、表面的には氣にいらぬものであったが、内容は立派な馬であったという。これは先の「雜説」と同様に、真の人物を見出すことの難しさや、それを見出す能力をもった人の得難いことを比喩的に述べたものであるが、賢人・賢才を論ずるに馬のあ

げられていることは、馬の価値を側面から評価していることにもなるのではなからうか。こういった話題は郭隗についても同様に考えられる。郭隗というのは「隗より始めよ」のあの郭のことである。これは燕の昭王が天下の賢士を招こうとしたとき、郭隗なる者が話題として提供した死んだ馬の骨を大金で買ってきて、名馬を求めた人に差し出し、その結果死馬すら大金で買う、況んや名馬においておやというわけで名馬を得ることができた。それと同じでつまらぬ私即ち隗を採用すれば天下の賢士は必ず集まるにちがいないと。昭王はこれをいれ、天下の賢士を得ることができた。これもまた馬と賢士との関係をもった話である。

神秘的な馬、飛躍性をもった馬、賢人と並んで登場する馬、ほかに論理の遊戯として知られている白馬があり、馬耳東風もある。

それらを一括して述べることは難しいが、未来を志向する我々にとっては、天馬空を行くの気で午どしを乗りきっていききたいものである。「人間万事塞翁が馬」とは真理を語っているかも知れぬが、もっともったたくましく、疾駆していききたいものである。

○ご案内

新年あけましておめでとうございます。読者の皆様の幸多き一年をお祈り申し上げます。

さて本誌においても、いよいよ本号より、「浄土句集」のコーナーが開設されることになりました。選者には、ホトトギス同人の一田牛畝先生(福岡市正定寺住職)をお迎えして、誌面の一層の充実をはかりたいと思います。

皆様からのふるってのご投句をお待ちします。

◇要項

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会宛

『金剛般若經』もまた、歴大なる般若經典類の中の単独の一經である。Vajracchedikā-prajñāpāramitā-sūtra というサンスクリット名の原題に対して、『金剛般若波羅蜜經』とか『能断金剛般若波羅蜜多經』などという漢訳名が伝えられているが、これは鳩摩羅什訳をはじめとして現存漢訳本だけでなくも八種も伝えられているという、この經典の盛んな流布状況の事情も反映してい

本經が、玄奘訳の『大般若經』十六会六百卷のうちでは、第九会「能断金剛分」に相当することはすでに周知のところであるが、いわゆる小品系統から大品系統へと増広発展したと考えられる般若經典類の經典展開史の上から見ると、いまだ不分明なところが多い。つまり、その思想内容についても、「大乘」とか「空」という重要概念も不明確であり、術語や用語も複雑でな

確かにその思想内容は、存在のあり方に実体性のないことを思想的核心に設定し、修道方法としては、ものに把われない、執着しないという一義をもって、その独特な否定論証を構築しているのである。そして、わかりやすい教義を繰り返しの論法によって展開して行く經文は、その全体の適宜な分量によっても、經典の読誦性を、そして受持性を増して行ったものといえよう。

(お)(經)(の)(べ)(一)(ジ)

金剛般若經

る。一般には簡便に、『金剛經』という略称さえ用いられている。また、本經が『三百頌般若經』といわれるのは、サンスクリット文のおよその詩頌の数に即して呼称されるのである。なお、經題の「能断金剛」(Vajracchedikā)とは「金剛石(ダイヤモンド)のように切れる」ということで、すべての迷いを断つという意味の『般若經』であることを示している。

く、第一に經典形式自体が単純な構成の古形を有している。普通には、この經典の説示形式が「Aは非Aである。だからAである」というような論述方法に特色を見出し、そこに般若空觀の本質があると認識されている。そしてこの經典を、大乘般若思想の確定する以前の性格をもつものとして理解し、初期般若文献として位置づける見方がなされるのである。

しかし、本經の成立年時や地域については、今日でも多くの問題を残しているものと見なされている。最近では『般若心經』などと同じように、般若文献の一つの精粹を集めたものとして、比較的後期(三、四世紀以降)の經典であるとする見解も登場している。つまり『金剛般若經』は、全体を第一周と第二周に二分でき、内容が繰り返しの増広であるともいわれるように、經文を短縮した反復經典とも考えられる。

本經の注釈書としては、インドではアサング(無著)の『金剛般若經論』が名高いが、中国仏教においては十数種にも及ぶ注疏が作製され、本經の人気の程が知られる。(H)



念佛ひじり三國志

(四十五)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



覚潤院は山科、安祥寺の一角を占める。塔中なのだが寺院らしい面影は全くない。七百有宇の堂塔伽藍を連ねる安祥寺とは谷ひとつ隔てて無縁である。深い樹林に囲まれ、寝殿造りの建物は優雅な庭園を配して、貴人の別邸といった結構である。

いま明遍は、暮色で葉末を黒く染めかけた樹林をくぐり抜けてゆく。歩き馴れた道をゆく足取りであった。

山科の安祥寺——

ここは嘉祥元年(八四八)に藤原順子の菩提を弔らい、慧運僧都が開基となって建立された藤原一門の寺である。

順子は藤原北家の家祖冬嗣の娘で、仁明天皇の皇后として入内、文徳天皇の生母となった。藤原一門が皇室の外戚として政治に権力を持ちはじめたのは順子皇后が端緒だったと言われる。それを裏付けるように安祥寺は京都の興福寺ほど大規模ではないが、時につれて堂塔伽藍を拡大していった。寺院の付属建物ばかりではなく、山科山麓には覚潤院のような邸宅も建てられていった。僧都明遍は歩き馴れた足取りで樹林を抜けてゆく。じ

＜都大路で法を説く熊谷入道＞



前号のあらすじ

関白九条兼実に対して、法然上人は、建久二年（一一九二）七月二十八日に最初の授戒を施してから、その後たびたび法を説きまた戒を授けている。東山大谷の禅室から兼実邸を訪問する法然上人に、時に熊谷入道も連れ添うこともあった。建久八年春には、上人とともに兼実邸に伺候した熊谷は、沓脱ぎのところで待たされるのを嫌ってわめき散らしたという。その声を聞きつけた兼実に召されて、上人の法話を仲よく聴聞したというエピソードが、『四十八巻伝』などに載っているのである。

ところで、建行六年三月六日には、源頼朝の軍勢が輝かく華やかに上洛している。都大路を整然と行軍する坂東武者たちの晴れ姿であった。そして、その随兵の群中に、わが子小次郎直家のりりしい武者振りを発見した時、鎌倉逐電以来の熊谷入道の雑念もすっかり消えうせたと考えるのは、はたして誤まりであろうか。

きに瀟洒な建物の前へ出た。

「光堂の明遍」

と、取次の従者に告げた。

相手は敬虔な態度で挨拶を返すと、奥へひっこんだ。覚潤院の主人、勝賢僧正は明遍とは同復の兄弟である。信西入道を父として母は憲（さとる）であった。

仁和寺で学び、醍醐寺の僧階を進叙させてきた弟だ

が、現在は東大寺の別当職にもあてられていた。

その弟勝憲を待つ間、明遍はいま都大路で別れてきたばかりの熊谷入道のことを思いうかべていた。

どちらを僧と呼ぶべきか。そんな矛盾が胸にわだかまるのである。

熊谷は武家から発心して法体になった。黒衣をまとして都大路を闊歩している。あの調子だと都人に仏法を説きまわっているにちがいない。

しかし、熊谷入道には住むべき寺もない。権律師という最少の僧階すらなかった。一介の私僧にすぎないのだ。私僧、と言えばこんにち都でどの僧よりも名高い法然でさえ同じひじりなのであった。

彼らに比べて生立ちが良血を受けたというだけで僧階ばかり昇進させる貴族僧侶たち。

この覚潤院の主人勝賢僧正も例外ではない。仁和寺、醍醐寺、東大寺……と伝承伝戒や教義とは関係なく重要な地位を襲名してゆく。しかも寺院内の顯職に就きながら私生活はこうした貴族の別邸のようなところに住んで、俗人と全く変らない。弟の勝賢僧正に何人もの妻がおり、子供もある事実を明遍は知っている。

一代の説教師、富楼那尊者の再来ともてはやされる兄の澄憲僧正に至っては、その私生活は乱れきったものだった。

法然や熊谷たち念仏ひじりとどちらが仏者なのであるうか。

明遍自身はこんな現状にささやかな抵抗を試みている。文治二年六月、大僧都に任ぜられたが明遍はこれを辞したあと光堂に籠居したのも一切の世俗（じつは僧侶社会内部の俗習）と絶縁して、ひたすらに仏法をきわめたかったからである。

だが、自分は在野のひじり（私僧）になったつもりでいても、ことあるごとに出自が、僧都という旧身分が妨げになった。ひじりグループのなかにも何かツテを求めて体制側と結びつこうとする輩が沢山いたからである。

あれほど期待をかけた大原勝林院における顯真僧正と法然を中心にした結集（大原問答）も結果としては顯真を天台座主へ昇格させる政治的な色合いしか描出し得なかったではないか。

今日、弟の勝賢僧正を訪ねたのもそんな俗事にかかわることであった。三日後、東大寺で営まれる將軍頼朝を

迎えた供養会で、勝賢僧正は咒願師を勤めるはずだった。導師は同じ信西一門である兄の覚憲僧正で、仁和寺の法親王守覚上人（後白河法皇の皇子）以下僧千名が参列することになっている。ところが大仏復興の立役だった俊乗房重源の列する席がない。

重源もまた、無位無冠のひじりなのである。彼のために供養会で何らかの役配を与えて欲しい、と弟の勝賢僧正に頼みこむことだった。

むろんこれは重源自身からの依頼である。その点、重源は俗中の俗だが、彼の場合その俗情は単純で他愛がなかった。大法令に参列出来るだけで満足なのだ。また、そこへ坐るために身を粉にして走りまわる男でもあった。

ひところは九郎義経との関係を頼朝に疑ぐられて生命の危険さえあった重源が、頼朝のふところへ敢然飛びこんでいって大仏復興を速進させたのである。その重源に晴れの供養会で「席」がないのである。この社会の仕組みが如何にゆがんでいるかを実証する。

明遍は、重源のためと言うより、このゆがみを是正するためにも弟勝賢を訪れねばならなかった。

「どうぞ此方へ」

いったん奥へ引っこんだ従者があらわれると、明遍をみちびいた。

屋内ではなく庭園の方へ歩き出す。

「僧正は？」

「はい、池の亭においでです」

「誰か来客でも……」

庭園にいる、ということは先客があつて面談中にちがいない。

「二位殿が……」

「二位殿がか」

明遍は思わず頬が熱ばむのをおぼえた。

樹林の入口に貴人の牛車が停まっていたが、あれは二位局のものであったか。

二位局。いまは丹後局と呼ばれる高階栄子。後白河法皇の愛人であった。法皇との間に一人娘、宣陽門院を生み落していた。

だが、明遍が顔を赤らめたのは、そんな亡き法皇にまつわるものではなかった。

浮御堂を配した隋円型の池。その向う岸に簡素が亭があった。

明遍が近づくと主人の勝賢僧正より先に、派手な累の着衣で身を包んだ長身の丹後局が立ち出でて、迎えた。頭頂からすっぱり黄色い布でおおうた高階栄子。しかし美しい眼鼻立ちは隠くされていなかった。

「お久しゅうござります」

やや大きめの唇が割れた。だが、右頬に出来た笑くぼが、その不調和な形を補って余りがある。

四十の坂を、もう二つか三つ越えたであろう。容色は衰えない。妖艶さがひとしお増した感じである。

「此処でお会いするとは……」

明遍は言葉がこもるのをおぼえた。やはり胸のうちはただことではなかった。

「兄者人、さあ此方へ」

と、勝賢僧正がソツのない物腰で、亭内の座をすすめた。

亭内は円座になっている。すすめられた席は、高階栄子とまともに向い合う位置であった。

僧の身分を忘れた。いや、二十数年間の歲月すらどこかへ消え失せてしまいそうである。

平治の乱で失墜した信西入道の一族。当時、東大寺に在籍していた小禅師の明遍にも流罪の刑が下った。しかしこれは形式上のことで、母の実家に蟄居していれば良かった。そんなさなか、明遍に還俗する機会が訪れた。

信西の正妻だった高階重仲の娘（葉室長隆の未亡人で、後に大仏復興長官となった行隆の祖母、また法然の筆頭の弟子である法蓮房信空の曾祖母にもあたる）の縁で、高階支族の一家を継ぐという話だった。その絶家寸前の一人娘がこの高階栄子である。

つまりこの縁談を受容することは栄子との婚姻を意味した。明遍はそれとなく栄子と見合いをした。まだ十四歳の早乙女であった。

明遍の生涯に唯一度訪れた青春。

見合い、と言っても現代のように顔を見合わせるだけの形式ではない。母一人娘一人の高階支家を訪問した明遍は、その夜泊ったのである。高階栄子の未だみのらな

い女体を抱いた。

未だみのらぬ、どころではなかった。十四歳にしては大柄な栄子の肉体は、明遍の腕のなかで存分に回転し、なめらかに凜動した。不犯の明遍は性の悦楽をこの早乙女によって教えこまれた恰好だった。

かと言って、栄子が性の体験者とも思われない。天性のものなのであろう。

朝の帰路をたどりつつ明遍は、恐れをいだいた。栄子のような娘を自分は生涯の伴侶として愛しつづけることが出来るであらうか。全く自信がなかった。

本来なら、ただちに文を女性へ贈るのがしきたりだったが、明遍は姿を都から消した。高野山へ遁走して、還俗する機会を自ら断ち切った。

高階栄子がその後、後白河帝に接近し、その寵愛を一身に集めている、という消息を、明遍は彼女の天性の虫感を思いうかべながら、聞いた。あの女体なら法皇を落益させ得るであらう。

だが、妙なもので今、彼女への恐れやぶ気味さは微塵もなかった。二十余年の歳月が、一度抱いた女体へのなつかしささえよみがえらせるのであった。

「未だご落飾のままでございますか」

明遍は黄色い頭巾を見すかすような視線を向けて、訊いた。

「これですか。いいえ、丹後はもう女に戻っております」
あっさり頭巾を剥ぎ取って微笑んだ。短く剪ってはあったが、高階栄子の頭頂は黒髪でおおわれていた。

今を去る丁度三年前、後白河法皇が崩御した。その折、高階栄子は喪に服するために落飾した。二位局出家の立会人は、法皇臨終の善知識をつとめた大原の本成房と、この席にいる弟の勝賢僧正であった。

「では……」

明遍は続ける言葉に迷った。

女に再び立ち戻ったということは、次の夫がいるということなのか。

「こんな老女でも誰ぞ欲しいという殿御がいらしたら……
明遍さま、お拾い下さいませんか」

先まわりをして丹後局は濃艶な笑みを満面に浮き上がらせる。

「わざわざお立ち寄り頂いた用向きは？」

場馴れぬ兄に助け舟を出したつもりで、勝賢僧正が話

題を転じた。

「じつは俊乗房重源のことで」

「勸進上人が何か……」

「十二日から始まる東大寺の供養会のことだが、重源上人は何の役人にもなっていない」

明遍はあれほど大仏復元に努力した重源の不遇な立場を力説した。

「重源上人には何のお沙汰もなかったのですか」

勝賢も驚いたという表情だ。しかし表情だけで、次の対応策を全く口に出そうとはしない。彼とても最近、東大寺の別当に就任したばかりだ。内部の事情に通じていないのであろう。

「妾から將軍家へ、明日にでもその旨を申し伝えておきます」

横合いから丹後局がきっぱりと言い切った。

「あなたが鎌倉どのに？」

丹後局と將軍頼朝との結び目が、明遍にはどうしても理解出来なかった。京都の公卿で頼朝に通じているのは九条関白兼実ひとり。これが明遍の情報網がとらえた戦後の政脈だった。

「じつは明日、將軍家とお会いすることになっています」

「貴女はそんなに鎌倉どのと親しくしているのですか」
勝賢僧正も驚愕な表情を結んでいる。

「親しくしていると言うほどでもありませんが……」

「今度いきなり私は東大寺の別当職に補せられた。鎌倉どののご意向だと洩れ聞いていたが、かげで貴女のお力添えがあったのですね」

「違いますわ。妾にそんな力があるわけがないでしゅう」

笑みをふくんだ瓜実顔は妙に魅力があった。自信に満ちた女の輝きだ。

「鎌倉どのとは未だ一度もお目にかかったことはないし……」

「僧正はそんな詮索よりも備後領のことだけを手早くまとめて頂ければよろしいのです。東大寺領からお外ずしになって下さい。ぐずぐずしていると、また月輪どのから横槍がはいります」

丹後局のこの命令口調は何であろうか。まるで弟の勝賢僧正は彼女の従者みtaiである。

そこで丹後局はすつくと立ち上がった。円卓をまわつて明遍のかたわらへ来た。之も言われぬ芳香が鼻孔をふさいだ。

「明遍さま、お船は？」

「船とは……」

「船に乗るのはお嫌いですか」

「いや別に好きでも嫌いでも……」

「一度近いうちにお誘いします。今度素晴らしいお船を造ったのです」

「貴女の船ですか」

「はい。天王寺まで下ります。最初のお客さまは將軍家で、次を明遍さまにしましょう」

鎌倉頼朝は彼女の船に同乗すると言うのか。

將軍の次は自分……彼女はいったい何をたくらんでいるのだろうか。

すでに彼女の馭者が庭の入口まで迎えに来ていた。

長い身体を折って丹後局は兄弟二人に別れの挨拶を告げた。

池辺をめぐって消えてゆく女のうしろ姿に明遍は二十余年むかしをたぐり寄せている。あの累の着衣の下で、

十四歳の赤裸な肉体が透視されて見えるようであった。

「いやあ、たいへんな人ですよ、兄上人」

二人きりになると、勝賢僧正はくつろいだ調子になった。

「備後領とは何のことかな」

明遍の口調も兄貴分のものだ。

「私を東大寺別当に補したのも、ねらいは備後国大田荘のことのようで」

従者に運ばせた酒を勝賢はひと息に飲み干した。近ごろ滅法強くなったようである。ふくべを明遍にさしむけてきた。

あまり酒のすすまぬ明遍だったが、じっくり弟から話を聞き出すためには相応の付き合いはしなければならぬ。

信西入道の子供は沢山いたが、同腹の兄弟は二人だけだった。酒気がまわれれば、洗いざらいぶち負けてくれるだろう。

＜後白河法皇の臨終＞



丹後局、浄土寺二位とも呼ばれていた。高階章尋の孫にあたる。父は出家して澄雲という。名跡が絶えたので、明遍が養子になりかかったことは前に触れた。

一夜の契りだけで不縁になった。このあと彼女は北面の武士、相模守平業房の妻となった。後白河法皇直属の武士だったが。

夫が死んで、替って彼女が法皇に仕えた。ただし警固の武士ではない。愛人としてである。娘を生んだ。宜陽門院と呼ばれる内親皇だ。

数ある法皇の愛人のなかで高階栄子はトップの座を占めるのに、それほど時間はかからなかった。

後白河法皇がその破乱に富んだ生涯を遂じたのは建久三年の三月十三日の暁方であった。寅の刻、午前四時だ。

その前夜、深更から六条西洞院御所では凄さまじい光景がくりひろげられていた、と勝賢僧正は証言するのだった。

法皇臨終の知らせで善知識として大原の本成房が呼ばれた。善知識はこの僧一人だけではなかった。丹後局に強く要請されて勝賢僧正に駆けつけた。

本成房のは型通りの臨終儀だったが勝賢僧正は宗教とは無縁な役割を課せられた。法皇が所有する百二十二カ所に及ぶ「長溝堂領」の荘園を丹後局に相続させる遺言を聴取しておかねばならぬのである。

大腹水（——「吾妻鏡」の記載）で息も絶え絶えの法皇に問いかける。

「備後国大田莊二六三町、浄土寺二位がご相続のこと、しかとお間違いございますまいな」

勝賢の声が聞こえるのかどうか、法皇はうなるばかりである。しかしうなるだけでいい。

かたわらで丹後局の腹臣であった主税守光遠が「お確認済み」として台帳を丹後局名に書き改めてゆく。

ちなみに備後の大田莊は、仁安元年（一一六六）、現地の郷司だった橘氏が平重衡に寄進した土地である。平家滅亡後、所有は後白河法皇へ移った。さらにここで丹後局のものとなったのである。

帝（みかど）でもあり愛人でもある法皇が、刻々と命終の時をきざんでいるというのに丹後局の関心はこの遺産相続にしかなかった。しかも彼女のかたわらには年若い親皇が寄り添っていた。梶井宮門跡である。法皇の眼を

盗んで両人が愛情関係を結んでいる事實は、禁裏で誰一人知らぬ者ともなかった。

長溝堂領百十二カ所すべての相続が終わったとき、この一代の権力者法皇は、はじめて西方浄土へ旅立つことを許された。再び呼びこまれた本成房は、法皇の御手に定印を結びながら念仏をくり返した。七十遍唱えたころ、法皇は息を引き取られた、と書き残されている。

後白河法皇の臨終善知識を法然がつとめたと伝記は書くが、あり得ないことである。また、かりに事実だとしても法然や浄土教徒にとって「名誉」などではないはずである。物慾に取り憑かれた修羅場にもひとしい光景だったからである。

「僧正はなぜそんなお役目を引き受けたのだ」

明遍は、あきれ果てた表情で弟を問いつめる。

妻さまじい光景だった、と語りながら法皇に証言を強要した勝賢僧正はけろりとしているからである。

「お恥かしい話だが、私も荘園が欲しかったのです。僧階ばかりは進むが、財産は何もない」

「それで、備後の門領なぞをもらい受けたのだな」

「お沙汰だけは頂戴したのですが……」

「駄目か」

勝賢僧正の取り分だけではなかった。丹後局があれま
でにして相続したはずの長溝堂領は大半を国庫へ没収さ
れてしまったのである。関白兼実、この造成された遺
言を無効であるとし、法皇所有の荘園はすべて旧持主へ
返却された。

備後国大田荘は、平重衡の所有だったから、彼に堂宇
大仏を焼かれた東大寺が、いわば賠償のような形で受領
したのである。

「だが、やっと約束が果たされる見通しが立ちました」
勝賢僧正は嬉しそうに語り続ける。

「東大寺側が返してくるというのか。よくそんな気にな
ったな」

東大寺の僧侶たちの慾ばり加減は、そこで育った明遍
は百も承知していた。

「東大寺が、ではありません。鎌倉どのが強権で」

「しかし月輪どのが諾しはすまい。それと鎌倉どのと関
白とは無二の間柄だ」

平家滅亡後の政治は、法皇在世中は法皇自身の手で攪
乱はされたが、頼朝と兼実とが緊密一体となって処理し

てきたのである。公武合体の実績を、これまでもさまざま
な面で残してきている。

だいいち、長溝堂領にしても頼朝の固い意志のもとで
私有化をはばんできたのである。

その正義の旗手である九条兼実を裏切って、なぜ頼朝
は浄土寺二位丹後局に組するのであろうか。

「話が面妖でないか」

明遍の問いに。

「兄上はご存じなのですか」

と、勝賢僧正は満面に笑みを浮かべる。

「何のことをだ」

「鎌倉どこのこのたびご上洛の目的を、です」

「東大寺の供養や後鳥羽帝への拝謁であろうか」

「それが違うのです。ほんとの目的は婚姻のことです
います」

「婚姻だって？ 誰の婚姻か」

「鎌倉どこの息女大姫が入内するのです」

「頼朝の娘が皇后になると言うのか」

「話はおおいに進んでいるようです」

寝耳に水、とはこのことだろう。

「帝には宜秋門院という立派な中宮がいらっしゃるのに。それと近ごろ宜秋門院はご懐妊との噂だが」

九条関白兼実の娘任子。後鳥羽帝の中宮として入内。法然から授戒した女性だが、最近めでたく懐妊、「着帯」したばかりである。そこへ政治上でも最も親しかった鎌倉頼朝がわが娘を割りこませようと言うのである。妻の政子や当人の大姫をともなつて、一族郎党を引きつれ大挙上洛してきた。

関白兼実は、浄土寺二位らの手で蒔かれるこの陰謀の種に気づいているのであろうか。建久六年三月十五日、つまり頼朝が東大寺で盛大な供養会を営んだ翌々日、兼実の日記「玉葉」にこんな記述がある。

此日、中宮有_二御着帯_一。承暦以後、於_二内裏_一、有_二此事_一。元永、治承又同也。寛弘五ヶ月。有_二御退出_一。又於_二禁裏_一、不_レ記_二着帯事_一、憶_二事理_一。於_二里亭_一、可_レ有_二此儀_一、仍進_二寛弘例_一、去八日有_二御退出_一也。吉勝申刻加持山座主、使権大進兼房候也。

御着帯のことだが、中宮任子は三月八日にこの行事の

ため里方の九条邸へ帰っているのである。そんな先例は最近ない。みんな禁裏で帯の行事はおこなわれる、と兼実は首をかしげる。不安が兆したにちがいない。御着衣のため退出した宜秋門院は再び後鳥羽帝のおそばへ戻ることは出来ぬのではなからうか。

兼実が頼朝の娘大姫の縁談を嗅ぎつけた証拠である。しかしそんな事態を兼実は否定したい。頼朝との仲を思えば、おこり得ぬ背信行為ではないか。

過去の皇后「御着帯」の記録を拾い集める。そして寛弘年間（一〇〇四—一〇一一）に中言が里方へ帰つて「帯をした」先例を兼実は発見する。百三十年も昔のことである。しかし兼実はホッと安堵している。

寛弘五年は一条帝の治政だが、中宮として入内したのは藤原歴代中での権力者、御堂関白道長の娘彰子であった。

御堂関白のご息女でさへ実家で御着帯の儀をなされたのだ、と安堵の思いが日記の行間ににじんでいる。こんな先例にすがりつかねばならぬほど、兼実の不安動揺は深かったのである。

（つづく）

年 新 賀 謹

〒170 東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一 大正大学 電話(〇三)九一八―七三二―代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一―二二四―代表	淑徳短期大学 学長 長谷川良昭 東京都板橋区前野町五―三―七	京都家政短期大学 大橋俊有
埼玉工業大学 松川文豪	東山学園長 藤原弘道	東海高等学校長 滝 俊立 阿弥陀寺住職 神守保育園理事長	鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田祐規 熊本市九品寺三―一―一
〒292 木更津市中央一―五―六 選 択 寺 住 職 山 本 禄 瑞 副住職 山 本 恭 雄 電話(〇四三八)二二―二二九三、四	浄土宗近畿地方教化センター委員長 浄土宗大阪教区長 漆間純成 大阪市北区東寺町十一 九品寺中	法然上人二十五番第二番札所 高松市仏生山法然寺 細井俊明 電話(〇八七八)八九―〇四〇六	中勝寺 藤井大俊 〒658 神戸市東灘区御影町郡家

年 新 賀 謹

無量山 伝通院 住職 大河内秀敏	焼津市小川三 光心寺住職 北山良祐	青森市本町一―一―一二 正覚寺 楠美知行	専念寺 俵口隆成 京都市左京区西寺町仁王門上ル
蓮勝寺住職 柴田敏夫	だん王法林寺 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白幡憲佑 横浜市南区庚台（久保山）	西住院 戸川靈俊 京都市左京区黒谷町三〇
台東区議会前区議会議長 自由民主クラブ幹事長 吉水現佑 光照院住職 〒111 台東区清川一―八一―二一	大雲寺住職 西城正倫 〒132 江戸川区西瑞江二―三八	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	〒456 名古屋市熱田区尾頭町四六 雲心寺 桑山春山

年 新 賀 謹

保元寺 里見達人 東京都台東区橋場一―四―七	称名寺住職 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二二―一五七八	中島真哉 青山梅窓院 東京都港区青山二―二八―三八	野呂幸進 教安寺 川崎市川崎区小川町六番地二 電話(〇四四)二二―一四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸寺 原口徳正	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八 電話(〇五四二)五二―三六七三	近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八二)二三―〇八〇二	光運寺 飯田信弘 四日市市中部三―一二
北川一有 〒111 東京都台東区鳥越二―一三六 長寿院	稻田稔界	青森県弘前市新寺町一〇八 貞昌寺 赤平昌導 (祖 畦)	法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○謹賀新年、あけましておめでとうございます——「新しい年のはじめ、輝くばかりの陽春に向けて、『浄土』誌の読者諸賢とご一緒にまずは心から喜び祝いたい。本年もまた念仏の同声唱和のうちに、安らかな幸多い日暮しがいたせますように」——これは昨年の本欄で書き記した言葉であるが、初春を慶賀する気持ちに変わりがあろうはずはなく、本年もまた同じ想いをしたためて、読者の皆様ともども新しい年の春を迎えたい。

元日や上々吉の浅黄空

一茶

梳く度に髪は初日に光りゆく 知世子

○「一年の計は元旦にあり」——確かに、新しい年の始めのその第一日目こそ、私たち自身の今年を占うもつとも大切な日である。しかしその思い改まつた清く潔い心も、翌日以降にはもう忘却のかたへ追い払つてしまうというのでは、なんとも味気ない。

それだけに、思い立ったその心の馳せる世界は、分相応にみずからの力量に応じた可能性に焦点を合わせたいものである。

至誠^{ニシテ}而不^レ動^カ者^ハ、未^ダ之^レ有^リ也。
不^レ誠^{ナラ}、未^ダ有^リ能^カ動^{カス}者^ニ也。

「至誠ニシテ動カザル者ハ、未ダコレアラザルナリ。誠ナラズシテ、未ダヨク動カス者アラザルナリ」——これは『孟子』の中の一節である。誠実を尽して、感動されないうことははない、逆に不誠実で他人を感動させることもないというのである。私は、この訓言に教えられて、新しい一年を「誠実」という言葉をモットーとして生きたい。もとより、こんなことを改まって述べることもおかしいし、またこんなことからこそ実際に正しく行なうことはむずかしい。しかし、念仏の唱和を实践する日暮しのうちに、この「誠実」の二字を刻み込んで行きたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻

正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十二年十二月二十五日 印刷
昭和五十三年 一月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

年 新 賀 謹

岸 信 宏

京都市東山 知恩院

浄土宗宗務庁

浄土宗宗務支所

法主 大野 法道

大本山 増上寺

大本山 光明寺

法主 石井 真峯

大本山 清浄華院

法主 高 畠 寛我

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕 生 寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

西 福 寺

稻 岡 覚 順

川口市西川口三一二四

大本山 善導寺

法主 宮 本 文 哲

滋賀 福泉寺

敦賀 西福寺

鵜 飼 隆 玄

鎌倉大仏殿 高德院

佐 藤 密 雄

〒248 鎌倉市長谷四一二二八

祐天寺

巖 谷 勝 雄